《紹　介》

小川直之著『摘田稲作の民俗学的研究』

田 中 耕 司*

農学、なかでも栽培学を専攻する人たちのあいだで、「直播栽培」という言葉は知っていても「摘田」という言葉を知る人は、もはや少なくなってしまったかもしれない。言葉はともかくその実態や分布となると、それを正確に知る人はおそらくさらに少なくなっているにちがいない。すでに廃絶しその存在すらいまや忘れ去られようとしているその摘田について、著者の長年の調査研究をまとめたのが本書である。その標題に「民俗学的研究」とあるものの、わが国やアジア稲作圏の稲作技術や農耕文化を考えるうえで参考とすべき議論が展開されているので、この場をかりて紹介してみたい。

まずその構成と内容である。600ページ余におよぶ本書を通読するにはやや骨が折れるが、そこに盛り込まれた史資料と現地踏査による観察・聞き取り調査の結果を丹念に辿れば、読者は摘田についてのひとかどの専門家になれるにちがいない。それほどの豊かな資料性と濃密な記述、これが本書をつらぬく大きな特色である。

本書は、序章と終章を含めた5つの章からなる。すなわち、

序　章：摘田稲作研究の課題
第一章：摘田稲作の確認
第二章：摘田稲作の諸相と分析
第三章：摘田稲作と畑作
終　章：摘田稲作研究の展開

の5章である。そのうちもっとも多くのページをさいているのが第二章で、そこでは、関東地方の諸県、三重県、南九州など、かつて摘田が広く行われた地方での摘田に関する史料・伝承・事例・特色などが詳しくまとめられている。

各章の内容を簡単に紹介すると、以下のようになる。序章では、まず本書の課題、すなわちなぜ摘田の民俗学的研究を進める意義があるのかが論じられる。民俗学分野において農耕文化に関連して従来から行われた研究には二つの方向があったが、そのいずれでもないもう一つの方向を目指すのが著者の摘田研究であるという。従来からの二つの方向とは、一つが農耕様式から日本文化の特質をみようとするもの、そしてもう一つが日本人の生活のあり方のなかに農耕による文化形成のあとを探ろうとするものである。そしてこれらとは異なった第三の方向、すなわち農耕のあり方そのもの、あるいは農耕技術自体を問題とする研究視座が著者が本書でとる立場である。

では、農耕技術自体を民俗学がとらえようとするとき、どんな指標あるいは分析視角が必要とされるのか。これが、著者が続いて論じる問題点である。これについて、すでにアジアの稲作論や農業生態論に関連して提示された稲作の「農学的適応」や「工学的適応」という指標に加えて、稲作技術に関わる文化的あるいは社会的な慣習や制度あるいは観念などを含んだ「倫理的適応」

*たなか　こうじ，京都大学東南アジア研究センター

とも呼べる指標を設定すべきであるとする。農耕文化は、技術的適応の側面だけでなく、文化や社会の編成という「倫理的適応」によっても世代を超えて継承されるものであり、少なくともこの3つの適応のあり方を扱うことによって、農耕文化研究は十全足りうるという立場が表明される。

以上の研究視点を整理したうえで、本書の課題と方法が述べられる。摘田研究そのものが非常に限られた分野であったために既往の研究例が少なく、摘田の実態を正確に、しかも広範に明らかにしておくことが必要で、それを成し遂げることが課題の第一としてあげられる。そして第二が、稲作に対する現代の常識を破ることである。著者によると、すでに摘田稲作が廃絶した現在、おおかたの人たちは日本の稲作は古来ずっと田植えによる稲作、すなわち摘田に対する「植田」の稲作が主流であったと思っているが、実は摘田が相当広範に分布しており、この稲作を日本の古来からの稲作法の一つとして農耕文化研究のなかに定位する必要があるという。そしてこの二つの課題に接近するために、上述の3つの分析視角、すなわち農学的・工学的・倫理的適応という座標軸を設定しつつ、歴史民俗学的手法によって摘田という農耕文化の実態と特質を明らかにしようというわけである。

序章で展開された摘田研究の意義・課題・方法が具体的に提示されるのが第一章および第二章である。第一章の「摘田稲作の確認」においては、近世農書や明治から昭和に至る稲作慣行調査などの史料にもとづいて摘田の全国的な分布と作業法が確認され、その分類が試みられる。全国の摘田の事例を、大きくは、そもそも摘田法をもって稲作を行っていた「通常型」と苗代欠損や洪水被害の応急処置的な「植田代用型」とに分類したうえで、播種法と施肥法の違いを組み合わせた類型分類が行われる。

そして第二章が本書の圧巻で、著者が歴史民俗学的手法と述べた方法論がいかんなく発揮されている部分である。神奈川県の事例を扱った第一節にはじまり、東京都(第二節)、埼玉県（第三節)、茨城・千葉・栃木・群馬県（第四節）と続き、第五節において関東地方の摘田の特徴が整理されたのち、さらに三重県（第六節)、南九州（第七節）の摘田の事例へと続く。

各節は、どの地方に摘田の事例があったのか、そしてどんな作業が行われたのかを、伝承資料や在地性の強い農業日誌、村明細帳などの資料により提示し、摘田の実態を地域的に分析したうえで、摘田の地域的特徴を抽出するという構成をとっている。関東地方の摘田は、多くはツミタ・ツミダ・マキタと呼ばれるが、利根川や荒川の植田代用型（沖積低地型）と通常型（台地型）とに別れ、とくに通常型の摘田が唯一の稲作法であったという地域の多いのが特色である。こうした地域は湿田あるいは灌漑不足田であることが多く、このような水田条件と摘田の分布の一致が見られる。これに対して、マキタテあるいはマキツケと呼ばれる三重県の鈴鹿地方の摘田は、水田の作付体系の一構成要素として摘田が行われた点が特色である。ミウエ・ミマキと呼ばれる南九州の摘田は通常型のもので、関東地方と同じく湿田や灌漑不足田などの特定の水田と摘田が対応している。そして耕種法、とくに播種法に変異のあること、赤米と摘田の対応が多くみられることなどに、後章

に展開される農耕文化の系譜論との関連において注意が払われている。

本書の半分以上を費やした第二章を簡単に要約すれば以上のようになる。稲作に対する現代の常識を破るという著者の意気込みは、この章に盛り込まれたたくさんの事例やそれを整理した一覧表によく現れている。そしてその事例をたんに羅列するにとどまらず、摘田の類型分類と地域分布を対応させるとともに、摘田稲作の慣習、行事、儀礼などを探索する作業のなかに、地域文化の形成のなかに摘田を位置づけようとする著者の本書作成のもう一つの意図がうかがえるのである。その意味において、第二章は本書においてもっとも重要な部分といえよう。

第二章で整理された摘田の実態をもとに、摘田稲作の特質を論じるのが第三章である。摘田の播種法が植田の苗の植付け法に比べて変異に富むこと、そして摘田のもっとも一般的な播種法である、播種時に種子と肥料を混ぜ合わせる種肥混合点播法を具体的にとりあげて、畑作農法との類似点がとりあげられる。結論的には、摘田稲作がきわめて畑作の技術的要素を取り込んだ稲作法であることが、畑作の播種法との対比（第二、三節）および摘田の儀礼（第四節）の分析を通じて仮説的に結論づけられる。

そして、その仮説をさらに技術系譜論の面から検討するのが終章「摘田稲作研究の展開」である。マイナーな稲作法としてすでに顧みられなくなりつつある摘田に、農耕文化複合論、あるいは稲作系譜論の立場から光をあてようとする試みが仮説として提示される。摘田の「民俗学的研究」にとどまらない将来の「展開」が示されるのが終章第二項の「摘田稲作の系譜」である。

そこでは、日本の稲作自体を植田と摘田が複合した「農耕文化複合」とみる視点が提示される。著者は、その視点を「稲作あるいは畑作のどちらか一方といった単系的な捉え方をするのではなく、（略）複数の農耕を基盤とする文化の複合によって民俗（摘田：筆者注）が成立してきたとする、多系的な捉え方の視点」（p.573）と表現しているが、その視点をさらに古代の日本稲作へと敷衍して、古代の稲作を植田と摘田型直播が複合したものと想定する立場が、摘田の系譜論として論議される。日本への稲作伝播論のこれまでの議論を援用しながら、北九州にもたらされた水田造成技術を伴う植田稲作の伝来以前に、摘田稲作が日本へもたらされていた可能性が高く、その後の両稲作の「併用混在あるいは並存」が日本の各地、とりわけ限界水田や条件不利水田に摘田を残すことになったという結論をもって、本書が閉じられる。

600頁におよぶ本書をもとより十分に紹介できるわけではないが、その概略は以上のようである。今後これを凌ぐものがおそらく世に出ることがないという意味において、本書に満載された史・資料は今後も大いに利用・参照されることになるものと思う。さらに、例えば「倫理的適応」という概念や、日本稲作を複合農耕文化として位置づけようとする仮説の提示に現れているように、地道な研究成果に裏づけられた新しい理論展開が本書にいっそうの魅力を与えている。「一読を」というにはあまりにも大部ではあるものの、会員諸兄姉に是非お奨めしたい本である。

（1995年，岩田書院，13,184円）